
六花と炎と死神と。

湊奈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

六花と炎と死神と。

【Nコード】

N2170Z

【作者名】

漣奈

【あらすじ】

神が息づく世界・カルチエールクシア

持って生まれたらしい魔法に悩みつつ、喪った過去の記憶を捜す青年・ヘル。

忘却に怯えながら、忘れない方法を捜すエルフ・フェリ。

臍げで不確かな前世の記憶を辿り、竜を捜す少女・アリア。

冒険者ギルドの有名チーム「ザ・シーカーズ」の3人は、それぞれ

が探すモノのために世界を巡る。

プロローグ：リンドヴルムの後悔

アイツの事を、思う。

冷たく凍てついた氷の柱に眠る、もう何百年も前に死んだ女。

名前は、何と言っただろうか。

どんな声だっただろうか。

もう霞がかった記憶を漁っても、思い出す事ができない。

髪の色は黒だった。

けどそれは、氷の柱に眠るアイツが黒髪だから、そう分かるだけだ。

あの柱がなければ、もう覚えてないだろう。

瞳の色は青だった。

けどそれは、氷の柱をアイツが自分で作ったから、そう分かるだけ。

氷属性の魔法を使う者は、皆青い瞳をしているからだ。

・・・あの柱がなければ、やっぱりこれも忘れていたんだろうか。

俺はそれだけ、長く生きたのだろう。

アイツは、また巡ると言った。

人でもエルフでも獣人でも、また生まれ変わったら自分は俺を捜すと。

言葉の細かいニュアンスも、どんな状況だったのかも、もう覚えてない。

記憶のバックアップを捜さなければ、というこの思いとて長くは持たないのだろう。

もう、それだけの月日を生きた。

数えるのが億劫になるほどに。

アイツはきつと、俺から忘れられなくなかったんだ。

だから最期に、生きながら自分を氷に封じた。

時の流れから離れて、俺がアイツを覚えていられるように。

けど、俺はもうアイツの事をほとんど覚えていない。

水晶に封じた記憶を見ても、いずれ自分の事だとわからなくなる日がある。

「ごめんな、」

沈黙の中、名前を呼んだつもりになって。

その沈黙が痛くて。

小さな意地を張らずに、ちゃんと名前で呼んでやれば。

そしたら俺は、今でもアイツの名前を覚えていたんじゃないか？

そんな後悔も、もう遅すぎて。

氷に映る俺は、泣いていた。

涙の熱を、久々に感じた。

呼びかける名がない事が、悲しかった。

俺はアイツの眠る部屋を出て、思いきり吠えた。

時に遺された竜の咆哮が、聞く者のない平原に響いた。

1話 ルキアにて(前書き)

早くもお気に入り登録してくれた方がいました！
感謝感謝です

1話 ルキアにて

神が息づく世界、カルチエールルクシアー

海に囲まれ、2つの月と1つの太陽を戴き、いくつかの種族と3つの大陸を擁する世界。

これは、そんな世界で紡がれる記憶の物語だ。

大陸の1つ、ラヴェンナ大陸にあるルクシエ王国。ルクシエは冬が長い土地柄故に、古来から農耕や牧畜の代わりに細工物で名を轟かせた匠の国だ。

雪が降りしきるルクシエ王国王都・ルキアに、3人組の旅人が入った。未だ朝靄の抜けきれぬ、早朝の事である。

「だ〜っ、ルキア到着〜！ 寒い、眠い、腹減った！」

「ヘルに同感！ 師匠、アリアももうお腹ペコペコです！」

「2人共、うるさいわよ。時間を考えなさい。まずは宿を確保して、それから何か食べましょう」

褐色の外套マントのフードを取りながら真っ先に叫んだのは、黒い髪と瞳の少年。ツンツンと立った髪を掻き回しながら、「これではらくは雪道を歩かなくてすむ・・・」と疲れた様子で呟いている。簡単に見た外見年齢は、15から17ほどだ。

フードを取りつつ少年に同調したもう1人は、肩にかかる程度まで伸びた黒い髪と赤い瞳の少女。右の瞳を隠す形で前髪を伸ばす少女は大人びた顔立ちをしているが、1人称に「アリア」と自分の名前を使うあたりに幼さが垣間見える。差し引きしただいたいの年齢は、少年と同じ位。

「やいやいと騒がしい2人を窘めたのは、長い金髪に尖った耳を持つ妖精族エルフの少女。だが大多数の妖精族エルフとは違い、瞳は緑でなく青だ。見た目の年は2人と同じ位だが、短命種の通人族ヒュームの2人と違い長命種の妖精族エルフなので外見での判断は宛てにならない。

「お腹空いたーっ！」

「あつたかいシチユーっ！」

黒髪の2人が、まだ朝早い街に快哉を叫ぶ。そして即座に、妖精族エルフの少女の鉄拳を脳天に食らって悶絶した。妖エ

「フェリ、ちよつとおく・・・本気で痛い」

「師匠、酷いですう」

少年の方の名前はヘルといい、苗字は持たない。少女の名前はアリア・ヘイルズといい、妖精族エルフの少女の名前はフェリアンヌ・ウイルヘイミアといった。

「2人共、早く捜すわよ」

「はい」「了解ですせんせい師匠」

―ルクシエ王国王都・ルキアの宿屋《風花亭》―

「シチューがあつたかいよお〜！」

「パンがふかふかだ〜！」

宿屋《風花亭》の食堂に、3人組の旅人がいた。言うまでもなく、フェリ・ヘル・アリアの3人である。

「あらあら、嬉しい事を言ってくれるねえ！　そんな子達には、後で弁当作ってやろうかね」

宿屋の女将も彼らの食べっぷりは嬉しいのか、にこにここと笑いながらシチューをよそった。飢えた獣のような勢いで食べるヘルとアリアを横目に、フェリは優雅にシチューを食べている。

「あんたら、冒険者？　ギルドには顔出したかい？」

「これから行く所よ。新しい街に着いたら宿屋を確保して、普段はその足でギルドに行くの。ま、その前に朝食が欲しいってこの2人がごねたから、今回は先に食べるの」

女将の問いにフェリが答える。横で「んぐぐぐー!?」「あ、アリア？　そんなに急いで食べたなら危ないって言おうと思った瞬間に詰まらせるとか何!?　み、水ー！」と騒ぐ黒髪の馬鹿2人は、華麗に無視する。

ギルド、というのは夢に憑かれた阿呆が集う場所だ。

世界各地に支部を持ち、遺跡探索に始まり竜退治や山賊の討伐、それだけの技量を持たない者には簡単な魔物退治や薬草の採取をクエストの形で斡旋する組織だ。所属する者達は冒険者と呼ばれ、単独で行く者もあればチームで行動する事もある。

フェリ・アリア・ヘルの3人も、チームを組んで冒険する冒険者だ。チーム名を ザ・シーカーズ 捜し人 と言う、冒険者達の間では有名なチームだ。

街においては杯を傾ける仲間。

戦いにおいては背中を預ける戦友。

そして私生活においては、互いの捜し物を手伝う盟友。

「2人共、そろそろ行くわよーお代、これで足りるかしら？」

食事を終えたフェリが立ち上がり、テーブルに3人分の代金の銀貨6枚を置くと、未練がましくシチューを見る2人を引っぱって宿屋を出た。

「お弁当はいるかい？」

「いえ」

「夜までに言ってくれたら、お弁当用意するからね」

ありがとうございます、と言ってフェリは頭を下げる。子猫のよつに首根っこを掴まれたまま、ヘルがひらひらと手を振った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2170z/>

六花と炎と死神と。

2011年12月9日16時54分発行